

R3地域協働研究（ステージⅠ）

R03-I-24 「藤沢野焼祭を生かした持続可能な地域の創造」

課題提案者 藤沢野焼祭実行委員会

研究代表者 総合政策学部 吉野英岐

研究チーム員 千葉均・佐藤隆行・佐藤満（藤沢野焼祭実行委員会）

<要旨>

岩手県一関市藤沢町で40年以上続けられてきた藤沢野焼祭は、近年、参加者や参加作品の減少、担い手や資金の不足、祭りや焼かれた作品の活用などの課題に直面していた。本研究ではこれらの課題解決を目的に、研究代表者および学生による複数回の現地調査を実施した。その結果、藤沢野焼祭実行委員会に対し、藤沢野焼祭を中心とする地域イベントの年間計画の作成、おとし野焼体験のような野焼を気軽に楽しめる機会の提供、観光リング園・館が森アーク牧場・岩手サファリパーク・館が森高原ホテルなど地域に立地する各種観光施設との共同企画の推進を提言した。さらに、これらの工夫を通じて、地域内外の来場者の関心を高め、藤沢野焼祭の性格を縄文文化の実演という創設の理念を堅持しつつ、芸術・地域振興イベントから総合的な文化芸術観光イベントに組み替えていく必要性を提示した。

1 研究の概要

岩手県一関市藤沢町では、藤沢町の単独町制期から藤沢野焼祭実行委員会が「藤沢野焼祭」に取り組んでいる。藤沢野焼祭は1976年に考古学者の陶芸家で塩野半十郎氏（故人）の指導で縄文野焼きを再現したことを機に始まった「土と炎の祭典」である。毎年8月第2土曜・日曜に一関市藤沢町の藤沢運動広場に穴窯を設置し、そこで陶器約1000点を夜を徹して焼き上げ、翌朝、窯から出された作品を審査委員が審査を行うユニークなイベントである。

地元中学生が参加する「縄文人の火起こし」などをメインに据えて、2019年には、全国の高校生を対象に陶芸の甲子園「熱陶甲子園」を開催し、野焼人口の底辺拡大や次代の担い手発掘などに取り組んだ。制作された野焼作品は、藤沢商店街をはじめ公共施設、観光施設や自治会花壇などに展示される。地元では110基の街路灯に「炎」のフラッグを設置し、イメージアップを図り、2019年には、国道456号の一関市役所藤沢支所前に「縄文野焼ミュージアム」を整備した。また2017年からは若い世代を実行委員に加え、そのアイデアや意見を運営に反映している。

図1 一関市および藤沢町の位置関係



出典：<http://www.city.ichinoseki.iwate.jp/ijyu/bank/bank.php>

藤沢野焼祭は、これまで地域活性化に一定の効果をもたらしてきたが、知名度や認知度が低い状態が続いている。近年では参加者や参加作品の減少、担い手や資金の不足、祭りや

焼かれた作品の活用が課題になっている。また、地元商店街等への経済波及効果が少ない点も改善が望まれている。

そこで本協働研究では、研究代表者が有する知見や経験を生かして、地域イベントの開催を通じた地域創造のあり方に新しい提案を行い、今後のイベントの継承と地域への波及効果の拡大をもたらす方策を明らかにする。

2 研究の内容（方法・経過等）

本研究では研究代表者が取り組んできた住民主体の地域づくりの手法を地域イベントの研究に適用し、関係者の士気を高め、イベントの効果が可視化できるような提案を行っていく。手法としては研究代表者の研究室所属の学生が現地調査に参加し、若い世代の意見を取り入れていくような方法を用いる。研究経過は以下の通りである。

2021年

- 6月17日（木）現地関係者と研究代表者との意見交換
- 11月20日（土）～21日（日）学生も参加した現地調査

2022年

- 1月9日（日）一関市藤沢町子ども郷土芸能祭の参与観察および現地調査の中間報告
- 2月6日（日）学生による冬季のイベント参加や陶芸体験を含む現地調査
- 3月27日（日）野焼祭のキーパーソンである岡本太郎に関する情報収集（川崎市立岡本太郎美術館）
- 3月30日（水）縄文文化の展示方法に関する現地調査（二戸市埋蔵文化財センター他）

11月20日（土）～21日（日）の現地調査では、20日に藤沢支所での藤沢野焼祭の説明と野焼会場と、縄文ホールの見学後に、藤沢町内の2カ所（黄海地区・保呂羽地区）での地域資源の見学と自治会役員との意見交換を実施した。また農家民泊「観樂樓」に宿泊し、新たな宿泊の可能性を体験した。21日には、町内の観光施設である「ぼぼちゃんの観光リン

ゴ園」、館が森アーク牧場、岩手サファリパーク、館が森高原ホテル、金越沢ダム、大籠キリシタン殉教公園を視察した。

作品の展示



現地訪問調査



観光リンゴ園



宿泊体験



また2月6日には館が森アーク牧場内レストランテイルズで昼食体験、館が森アーク牧場による館が森風祭りの凧揚げ大会への参加、本間伸一氏の工房での陶器作り体験、登り窯とギャラリーの見学を行った。

昼食体験



工房見学



陶器作り体験



陶器作り体験



3 これまで得られた研究の成果

一連の研究活動に基づく研究代表者からの提案は以下の通りである。縄文の炎・藤沢野焼祭の置かれている立ち位置は今日の社会文化状況を思慮すると、絶好の位置にある。昨今は縄文がブームとなり、縄文女子や土偶に注目が集まっている。岩手県でも一戸町の御所野遺跡が世界遺産に登録された。したがって、縄文を切り口にイベントを開催することは大きな話題を提供できる。一方で、これまでの経緯から、藤沢野焼祭は地域住民のためのイベントや文化芸術のイベントという色彩が強く、観光振興の観点からの取り組みが官民ともに弱い。藤沢野焼祭は一関市の観光パンフレットにも掲載がなく、地域に多数存在する観光資源との結びつきも弱い。

そこで藤沢野焼祭の価値の向上について、①縄文と東北をつなげた岡本太郎の足跡や作品の効果的な紹介、②岡本太郎が藤沢野焼祭を本物の縄文の祭として認めたことの再評価、③野焼きという行為の希少価値の向上に向けて、地域を挙げて応援するという体制づくりを指摘した。まさにイベント価値の再認識の作業とその具体的な展開が不可欠である。

4 今後の具体的な展開

以上を踏まえて、今後の具体的な展開に向け、現地調査を行った研究代表者および学生からの提案の骨子は、地域の観光施設や観光イベントとの結びつきの強化、および陶芸体験などを取り入れた参加型プログラムの提案である。具体的な内容は以下の通りである。

①藤沢町内からの参加者の減少を食い止める

地元の小、中、高生に藤沢野焼祭に関わってもらうため、学校と実行委員会が連携して、児童・生徒が作品を出品することや陶芸体験授業を学校行事として組み込む。

②観光施設とコラボした町内ツアーの実施

新規の参加者に向けた企画として、藤沢野焼祭にりんごの収穫体験や、館ヶ森アーク牧場、岩手サファリパーク、館ヶ森高原ホテルでのアクティビティを組み合わせたツアーを造成する。さらに作品を見て回るツアーを実施し、作品の説明やコンセプトなどを製作者に聞き、実際に陶芸体験ができるプログラムを企画する。

③運営資金の調達の見直し

県内外からの参加者から参加費を頂戴する。これまで寄付していた地域住民や協賛していた地元企業には、切符やカードを用意し、それを用いれば参加費が無料になるという形をとる。

④縄文らしさ・藤沢らしさを表すプログラムの開発

火入れをするまでの時間帯に郷土芸能の実演や、子どもたちの踊り自慢大会など縄文らしい踊りや演奏を追加する。また、会場で陶芸教室を開催し、完成した土器をその場で火入れし、飲食も充実させる。

5 その他(参考文献・謝辞等)

研究活動全般を通じてご協力いただいた藤沢野焼祭実行委員会の皆様、町内の観光施設、一関市役所藤沢支所の方々に厚くお礼を申し上げます。また複数回にわたって現地を訪問し、現地調査や体験交流に参加し、意見発表も行った岩手県立大学総合政策学部の学生にも改めて感謝します。